

## ミュンヘン、ライデンでのシーボルト関係資料調査紀行(1)

本会会長 原田 博二

昨年9月15日から23日まで国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の共同研究員としてシーボルト関係資料調査のためドイツのミュンヘンに出張、ミュンヘン国立民族学博物館でシーボルトのコレクションを調査した。さらに、9月26日までオランダのライデン市に滞在、ライデン国立民族学博物館その他で主に川原慶賀の資料調査を行った。そこで、以後、随時、本たよりの紙面でその概要等をご紹介させていただく。

シーボルト(1796~1866)がオランダ商館医として出島オランダ商館に赴任したのは、文政6年(1823)のことであった。

文政12年(1829)国禁(国外追放)に処せられたシーボルトは、オランダはライデンに居住、以後、日本研究に没頭した。

シーボルト、オランダ政府にコレクション(約5000点といわれる)を売却、その後、貸与された資料をライデン市内の自宅に展示したが、これがライデン国立民族学博物館の設立へとつながって行くのである。

そして、これより以前の文政7年(1824)シーボルトは、バイエルン国王ルードヴィヒ I 世に日本の机を献上していたが、後にこれが縁で同国王に謁見、勲章を授与されている。

さらに、シーボルトは、同国王に「民族学博物館設立計画案」を提出している。

安政6年(1859)鎖国が撤廃されると、同年、シーボルトは、和蘭商事会社の顧問として長崎に滞在したが、文久元年(1861)には幕府の顧問として江戸に招聘され、以後、江戸に滞在した。

しかし、4か月後に職を解かれ、長崎にもどると、以後、日本の資料の蒐集を精力的に行い、翌年にはそのコレクション(42箱分)をオランダのアムステルダムに送っている。

オランダに帰国したシーボルトは、以後、そのコレクションの購入をオランダ政府に再三要請したが、1863年、オランダ政府は、シーボルトのこのコレクションの購入を断っている。

そこで、シーボルトはバイエルン国王ルードヴィヒ II 世(ノイシュヴァンシュタイン城をはじめ数々の城郭を建築した国王)にこれらのコレクションの購入を依頼、以後、ミュンヘンに滞在、コレクションの整理に没頭した。

ミュンヘンは、南ドイツのバイエルン州の州都で、人口は約130万人、煉瓦造の巨大な後期ゴシック様式の会堂本体と高さ

99メートルの2つの塔を持つ聖母教会(大聖堂)や19世紀のネオゴシック様式の堂々たる新市庁舎、巨大な王宮レジデンツ(ヴィッテルスバッハ家宮殿)など、中世の面影をよく伝えているが、そのほとんどの建物は、第二次世界大戦で連合軍の徹底的な空爆で破壊され、戦後、復元再建されたものである。

シーボルトは、1865年から1866年にかけて、実に3度目の日本訪問を計画するくらいに健康で、気力も旺盛であった。

そこで、日本訪問を実現させるためにもできるだけ早く、コレクションを整理し、バイエルン王国に売却する必要があったのである。



シーボルトが資料の整理を行った部屋

しかし、その売却は実現しなかった。というのは、シーボルトが与えられた部屋は、回廊形式の建物の2階で、暖房が十分ではなかった。そのため、風邪をひき、ついには敗血症を併発、1866年10月18日に70歳で死去したからである。

なお、この建物も復元再建されているが、現在は別の用途に使われ、シーボルトを偲ぶものは何もないということであった。

シーボルトの葬儀は、現在、ミュンヘン大学の大学教会を

兼ねるルードヴィヒ教会で行われ、10月21日に旧南墓地に埋葬された。筆者は、この墓地を訪れたが、案内板などは一切なく、最初は、どうなるかと思ったが、宝篋印塔を模した特徴的な墓碑であったのと、掃苔会で鍛えただけに、すぐに探すことができた。しかし、立派な墓地を想像していただけに、普通のヨーロッパ型式の墓碑であったらまず探さなかったであろう。

なお、シーボルトのコレクションは、1868年にギャラリー館で展示されることになり(これが現在のミュンヘン国立民族学博物館の設立につながる)、さらには、1874年ごろ、バイエルン王国は、シーボルトのコレクション(5420点といわれる)を購入した。

ちなみに、その売買価格であるが、シーボルトは6万ギルデンと見積もったが(筆者はその金額が現在ではどれくらいか推測すらできないが)、シーボルトの未亡人ヘレーネは5万ギルデンに減額したとのことである。(続く)



シーボルト墓碑



ミュンヘン国立民族学博物館